

農場実習報告①

～初めに～

この度、11月に約10日間農場実習をさせていただきました。恥ずかしながら、前職でも酪農業界に従事しておりましたが、農場にて実際に酪農の現場を体験するということをしたことがありませんでした。今回、実習をさせていただき感じたこと、経験させていただいたことをご報告させていただきます。

～1日の流れとその中で気付いたこと～

今回お世話になった牧場には搾乳ロボットが導入されており、私は主に搾乳ロボット牛舎における作業を経験させていただきました。とある朝の主な流れとして、①残滓回収、②治療ペンのベット掃除、③搾乳ロボット掃除、④搾乳できていない牛の牛追い、搾乳牛ペンベット掃除、⑤蹄浴槽の交換、⑥治療必要牛の確認・対応、⑦当日使用分サイレージのシートめくり・カビ除去、⑧乾乳牛移動という流れでした。ほかにも従業員の方それぞれで担当があり朝だけでも農場には日々様々な業務が溢れているということを改めて実感いたしました。

その中でも私が今回、実習の中で気になった点は、④の搾乳できていない牛の牛追いについてです。これは⑥の治療必要牛の確認にも当てはまることですが、この作業はまずロボットデータを見ることができるパソコンで長時間搾乳ロボットに訪問していない、もしくは直近のロボット訪問で何らかの原因により搾乳が失敗に終わってしまった牛を確認し、人が誘導してロボットに連れていく必要がある牛を特定します。その牛を1群約120頭の中から探してきて、ロボットのある方向に牛を追うという作業になります（治療必要牛であれば反芻の低下や伝導率の上昇など何らかの疾病に罹患している可能性のある牛を確認し、必要であれば治療ペンへ移動させます。）。一見、そこまで時間のかかる作業ではないように感じますが、牛がなかなか思うように耳標などの識別番号を見せてくれなかったり、飼槽に顔を出している牛は識別番号が見えにくかったりと、この120頭の中から対象牛を探し出すということがかなりの時間を要するというのを痛感しました。逆を言うところの作業時間を減らすことができればかなりの作業効率化につながるのではないかと感じました。

搾乳ロボットでの失敗回数を減らすために、乳頭の配置に問題のない牛を積極的に採用する、搾乳設定（訪問回数、期待乳量等）を変更する、治療牛をなるべく減らせるようにする（当牧場の社長は乳量を追い求めると治療が増えて、乳量が少し落ち着く

と治療対象牛が減って従業員の方々が喜ぶのでどちらがいいのかというジレンマがあると仰ってありました。)などの対策が必要になってくるかと思います。私個人的には、搾乳ロボット牛群の牛には首に個体の情報を記録したり、ロボットでの識別を可能にするタグが付いているのですが、それが対象牛は光ってわかりやすくなるなどの機能が付くとすぐ対象牛を見つけられるのではないかと感じた次第です。

～農場実習をさせていただいて～

当牧場には従業員の方が10名ほどいらっしゃいました。それぞれその日、自分がどこでどの作業をするのか前日のうちに話し合いをして当日スムーズに作業に取り掛かれるようにしっかりとコミュニケーションをとっていらっしゃいました。やはりコミュニケーション・報連相はどの職場でも必要不可欠であるということを実感しました。また、朝と夕方の間には社長の昼の業務も一緒にさせていただきました。畑での追播（フロストシーディング）、今シーズン使用した農機具の洗浄、牛舎の補修など多岐にわたる業務を経験させていただきました。今回の実習を通して、酪農業は牛乳を搾るだけではない、そして酪農は面白い、1番の仕事だと社長が仰っていたことがとても印象に残り、その仕事を一部だけだとしても経験させていただけたことで、とても有意義な実習になったと思っております。12月にも別の農場様で実習をさせていただく予定です。また何か発見や気づきを得られるよう精一杯取り組みたいと思っております。

星井田 瑛